

結婚
Marriage

—チンギス・カンの前半生 その3—
—Former half-life of Chinggis Qan No.3—

2019年10月12日

安田公男

URL : chinggis-ff

初めに

テムジン は 9 歳で父を亡くしてから 2 年後、一家でケレイト部族に行きトオリル（オン・カン）の世話になっていた。モンゴル社会では数え年 15 歳で成人となるので、ケレイトの庇護を離れて故郷に帰った。その年は 1176 年のことと推定した(1)。だがタイチュート氏族に襲われてテムジンが捕えられる。なんとか逃げ出して新たな生活の場所に移る。そして結婚年齢に達し、許嫁のボルテを妻に迎える。だが、間もなくメルキト部族に襲われて妻を奪われるという不幸に見舞われる。それを解決するまでの激動の青年期を年次も入れて考えて見る。

1. 秘史の記事

年表 1 チンギス・カンの成人以後、妻を奪還するまで

番号	節	記事内容(抄)
1	79~88	タイチュート氏族に追われて捕えられる。オノン河に逃げ込んだところをソルカン・シラに助けられて脱出した。
2	89	ブルカン岳の南のグレルグウ山のセングル小河のカラ・ジルゲン山のココ・ノール（青湖）に一家で移った。

3	90～93	八頭の馬群が盗まれた。取り戻しに行く途中でボウルチュ少年に出会い、その助けを借りて馬群を取り返した。
4	94	チェクチェルとチクルグウ山の間で弟ベルグテイと共に赴き、婚約していたボルテを娶る確約をボルテの父親デイ・セチェンから得た。デイ・セチェンはケルレン河のウラク・チョルの隅まで送ってくれてから帰ったが、その妻チョタンはテムジン一家の所まで送り届けてくれた。
5	95	ボウルチュと一緒に住む事を提案するとやってきた。
6	96	ケルレン河の源のブルギ河畔に移った。結婚の引き出物であった黒貂の裘をオン・カンに贈り物とし、旧部民の取り返しを依頼すると、オン・カンは願いを受け入れた。
7	97	ウリヤンカ族のジャルチウダイが韃を背負い、ジェルメという子を連れて訪れて来た。テムジンが生まれた時にこの子を家人として差し出したので、今こそ使って下さいと言った。
8	98～103	メルキト部族が、昔ホエルンを奪われた仇を返しに襲って来た。テムジン達は馬でブルカン岳に逃げ込んだ。妻ボルテには馬がなかったのでゴアクチン婆やと共に牛車で逃げたが、車が故障して捕えられた。ベルグテイの母も捕えられた。
9	104 節～ 115 節	テムジンはトオリルに妻の取り返しを依頼すると、オン・カンはジャムカの協力も要請して、何万もの兵力でメルキト領に打ち入り妻を取り返す。

8 番までの話は時系列的に書かれていると考えるしかない。ただ、5 の話には若干疑問が湧く。104 節以降の話は、極めてダイナミックかつ感動的に詳しく記述されているが、余りに矛盾が多く歴史事実とは考えられないと見なされている。

2. 考察

2.1 最初に帰った場所

1176 年の春、テムジンは 15 歳になった。成人したので一家でモンゴル部族の土地に帰った。遊牧民の移動のサイクルから考えて、季節はその年の春、現在の 4 月か 5 月頃であろう。テムジンは間もなくタイチュートに捕えられたが、後年勇者として知られるテムジンの 2 歳下の弟のカサルや異父弟ベルグテイは抵抗していないしタイチュートも相手にしていない。彼らがまだ少年だったという推測になり、この時のテムジンの年齢 15 歳を後押しする。タイチュートから逃げ出した時オノン河に逃げ込んだとあるから、彼らの勢力圏であるオノン河中下流域からそれほど遠くなかった所で捕まったはずである。即ち帰った場所は父祖伝来の、旧ビンデルからホルホ河周辺であろう。

タイチュートが襲った季節は文中に夏の初めの月の言葉があるので、現在の 6 月頃になる。即ち、一家が帰って来た噂が伝わってから 2 ヶ月ほどで襲撃されたことになる。いくらイエスゲイとタイチュートとの仲が悪かったとは言え、その息子のテムジンに捕縛の手が及ぶとは母親のホエルンも思っていなかったのに違いない。タイチュート側が襲った理由は不明であるが、ホエルンから部民を強引に引き剥がした追い目か、あるいはテムジンがしっかり者に育ったとの噂があり不安を抱いたのかもしれない。テムジンを色んな部落へ連れ回したというが殺すほどの名分は立たない。どうするつもりだったのか。時期を見て親族の誰かにでも引き渡すつもりだったのか。ソルカン・シラの助けもあったが、無事に逃げ出したのは相当に知恵が付いた証拠である。

2.2 青湖への移動

オノン河流域に留まると再びタイチュートに襲われる危険性があったので、上の事件の直ぐ後、1176年の夏中にココ・ノール（青湖）に移ったのだろう。青湖は図1の2の48.020N108.948Eの位置にある直径400m足らずの湖である。ブルカン岳の南でセングル小河の源流に近く、この後ボルテが嫁に行く道筋ともよく一致する。ホルホ河沿いに逃げて源流近くのここにたどり着いたのだろう。ビンデルから西に160kmほども離れておりモンゴル部族の勢力範囲の一番西あたりになる。現在の大きな町や幹線道路からは遠いが、ケレイト領への往来の道筋近くにあるので場所はよく知っていたと思われる。いざとなれば、ケレイト領に逃げ込むつもりだったのだろう。牧畜に不利な山中であるがここに住みつくしかなかったと思われる。タルバガンや野ネズミを食らって過ごしていたとあるのは、急ぎの移動で家畜を多く失ったからだろう。この地はこのようにみじめな再出発をした場所であったが、1206年、テムジンが支配下の遊牧部族を集めてチンギス・カンに登位する儀式を行ったのはここだった。その胸中を察することが出来る。

図1 ココ・ノール（青湖）の位置



2.3 ボウルチュとの出会い

ここでしばらく暮らすうちに馬群を盗まれるという事件が起きる。取り戻しの過程でボウルチュ少年と出会い生涯の友となる。父親はナクウ・バヤンという富者だったという。このナクウを後年のナイマンとの戦いに出て来るナクウ崖と関係づける説もあるが、カラ・トンを遥かに西に越えた場所で当時のケレイト領である。サーリ・ケールと言う地名が別々の場所に三か所あるほどなので、これも同じ名前の別の場所と考えた方が良い。青湖からあまり遠くないモンゴル部族の勢力圏の中にあっただと考える。父がナクウ・バヤン、即ちナクウの富者、という通称のようなものであり本名が明らかになっていない。集史の系図を見ると、秘史と違ってボウルチュにはトグルク・チェルビという弟がいて、父親の名がない。当時の富者は即ち大戦士でもあっただろうから、実名が伝わっていないというのは変である。弟という言葉も、親族の範囲が広いから実際は従弟だったのではないかとの説もある。このように、ボウルチュの出自については正確な判断が難しい。

2.4 ボルテを娶る

上の様な状況でも、2,3年ほど経てば家畜も増えて一家だけなら生計の目途もついてきただろう。テムジン18歳くらいとなり、当時の結婚適齢期である。10年前に婚約したボルテは1歳年長の19歳。20歳を過ぎると女子は行き遅れとなる時代であるから、テムジンとしても今のうちに結婚を正式なものにしないと婚約が権利落ちになる恐れがあったのだろう。だが現在は無一物の身である。断られるのを覚悟でデイ・セチェンの元に赴いたのだろう。彼はテムジンの無事は聞いていたが、結婚の約束は無効として、もっと別の安定した嫁ぎ口を探しに掛かっていたかも知れない。集史にはデイ・セチェンが結婚を渋ったが、ボルテの兄のアルチが父を説得したように書いてある。アルチの功臣譚として誇張しているのかも知れないが、そうであったとしても不思議ではない。ともかく、ボルテ家族は久し振りに訪れて来たテムジンを見定め、デイ・セチェンも彼の人柄を信じ将来に期待した。ボルテも幼い頃に会ったきりの婚約者が忘れられなかったのだろう。妻の生家で結婚式を上げる習慣だから、結婚式もそこで行われただろう。テムジンは大した礼物も持たずにやってきただろうが、相当大きな婚資をもらったようである。彼の感激は大きかったであろう。モンゴル帝国において、チンギス・カンの礎を作ってくれたデイ・セチェンの後裔が大きな勢力持つようになったのも当然であろう。

図2にデイ・セチェン一家がボルテをテムジンの元に送って行った想定経路（青線）を示す。筆者はデイ・セチェンのいたチェクチェル山とチクルグ山の間を、現在のチョイバルサンと推定している。そこからケルレン河に沿って西に行くには河を挟んで南北2つの街道がある。南岸路を歩いてタタルに出会ったことがイエスゲイの死の原因だから、その経路は通らないだろう。一行は北の道を通って、現在のウンドゥル・ハーンを目指しただろう。ウンドゥル・ハーンで北岸路は行き止まりになっている。ここが、デイ・セチェンが引き返したと言うケルレン河のウラク・ Cholの隅であろうか。ここから川に沿って北を目指す。タタル部族に邪魔される危険性は遠のくから、デイ・セチェンの見送りも不要になったのだろう。ココ・ノールまで行く道は、現在の街道が当時から続いているのであればそのまま進んだであろうし、昔は川沿いの路しかなかったとすれば、川を伝い

ながら行っただろう。チョイバルサンからの距離はほぼ 500km なので、牛車ならば 20 日足らずで到着する。結婚の季節は一般に秋である。テムジンが数え 18 歳の時なので、1179 年の秋に結婚したことになる。

2.5 ボウルチュが祝いにやって来た

テムジンが結婚後にボウルチュを呼びよせるとそのまま居ついたとあるが信じにくい。富者の一人子なら父親の元を離れて単独行動ができるはずがない。これが正しいとすれば、ボウルチュは確かにやって来たのだが結婚のお祝いを述べた後、将来テムジンと行動を共にする約束をして又父の元に帰った、としなければならないだろう。逆に、彼は富者の息子でもなんでもなく、どこにでも移動可能な身分の低い存在だったと考えることもできる。だが、秘史の内容を積極的に否定する材料もない。

2.6 ケルレン河のブルギ河岸に移る

デイ・セチェン家からの婚資には多くの家畜が伴っていたと思われる。ココ・ノールは手狭になったのでブルギ河岸に移ったのだらう。ケルレン河の源とあるので図 2 の A と B の黄線で囲った地域がブルギ河岸である。この地域の大きな町としてはムングンモリット (Mungunmorit) がある。ココ・ノールからは 40km ほどだが、当時の不安定な世相を考えると、いくら遊牧民とはいえまったくなじみのない所には移りたくはないだろう。むしろ、ここにボウルチュ一家が住んでいたのだから、テムジン一家の方が向かっていったと考えれば前節の内容と矛盾しなくなる。ボウルチュはその案内に来ていたのだらう。ただし、この場所は地理的に問題がある。図 2 の B にあるように、ヘンティエー山脈北方の山地からメンザ河経由で南下する道があり、敵であるメルキトにつながっているのだから。これが後ほど、ボルテが誘拐される原因となる。婚資にももらった多くの家畜のために広い牧地を求めて、結婚して直ぐに移ったと考えれば、1179 年の秋になる。

図 2 ボルテ一家がココ・ノールに向かった経路とブルギ河岸



2.7 オン・カンに部族の取り返しを依頼する

おそらく結婚後間もなくオン・カンに会い、デイ・セチェンから貰った黒貂のコートを礼物として部族の取り返しを依頼したのだろう。しかし、ケレイト部族のカンであるからモンゴル部族内の人間にどうこうしろとの命令は出来ないはずだ。ただし、テムジンの本来の遊牧地であるオノン河ホルホ河流域への異動と安全を保障してやれということなら、当然の権利であるので口利きできるだろう。そこで暮らさないと父にかつて使えていた親しい部民も近くにいないので、集めようもない。集められるか否かは当然テムジンの器量に掛かっている。

なお、毛皮の衣料は近年動物愛護の観点から忌避傾向にあるが、つい十数年前まで毛皮衣料は人気があり、ミンクのコートのような高級品から狐の襟巻などの手軽なものまで多く用いられていた。その中でも黒貂の毛皮のコートは古来より最高級品として知られていた。モンゴルの博物館にも、昔の王侯が用いていたというその衣服が展示されていたのを筆者は見たことがある。これをテムジンに持たせたデイ・セチェンがいかに裕福で、テムジンへの期待が大きかったかが分かる。

2.8 ウリヤンカ族のジャルチウダイが鞆を背負い、ジェルメという子連れて訪れて来た。

本文に、テムジンが生まれた時に黒貂の産着をイエスゲイ夫婦に贈ったとあるように、ウリヤンカ族はヘンティー山脈一帯で毛皮獣を捕えて生業としていた山地民であった。少人数で移動しながら猟をするので、部族の社会構造はあまり複雑ではなく自由民的な人々であったようだ。なお、ブルギ河岸と青湖の間くらいに鉄山があった(2)。鉄鉱石も製鉄に必要な木炭原料も山地にあるので、鉱石採掘や精錬もウリヤンカ族の仕事だったのではないかと推測される。ジャルチウダイが鞆を背負っていたというのも、彼が鉄加工をやっていた表れである。その製品を交易するために平原に出て来て、イエスゲイのダイナミックな活動を見聞きしていた。そうすると自分の子供は山の中から出させて広い草原で大きく活躍させたいとの思いが強くなったのだろう。テムジンが生まれた時に産着と共に家人として使ってくれとジェルメをイエスゲイ、ホエルン夫婦に差し出したという。ジェルメの年齢は数歳上だったかも知れないが、テムジン家の郎党以外では、最初の部下だった訳である。後年テムジンの四狗の一人と言われて出世したから、イエスゲイの遺児に託したジャルチウダイの思いは叶えられた訳である。

2.9 メルキト族に襲われる

ブルギ河岸に移った後、おそらく翌年の夏頃にメルキト族の襲撃があったものと考えられる。さらわれたのは妻ボルテとベルグテイの母であり、ゴアクチン婆やもいたかも知れない。集史によれば、ボルテはオン・カンの助力で無事連れ戻された。オン・カンにとってテムジンは義理の息子ともいえたので強く返還を言えたのだろう。ボルテはテムジンの元に帰る途中で長男ジョチを生んだ。ここでジョチがテムジンの何番目の子であるのかを考えてみたい。テムジンは4男5女の子持ちであったと集史は記す。もしもジョチより先に娘がいれば、母ボルテと共に幼いその子もさらわれていただろう。40歳前後と思われるベルグテイの母よりはるかに価値がある。オン・カンがメルキト領を安全に通過する代償として渡した娘がその後大事にされた例もあるので、留め置かれて帰って来

られなかったのに違いない。しかしそのような話はない。従ってジョチは長男でありかつ最初の子だったと思われる。イエスゲイの第2婦人であったベルグテイの母は戦利品として返還されなかったようだ。以前兄を失っていたベルグテイは母も失った。普通ならテムジン一家の元を離れたくなるだろうが、とどまってテムジンの功業を助けた。分け隔てなく息子として扱って一家を団結させたホエルンの人格によるものだろう。

メルキトの襲撃があったのは1180年の夏から秋で、ジョチが生まれたのは1181年の春から夏であろう。

2.10 オノン河流域へ再び帰る

コンギラト部族の氏族長デイ・セチェンの娘との結婚、妻の奪還で見せた政治力。これらはモンゴル部民に驚きを持って伝わっただろう。二弟のカサルと異父弟ベルグテイは結婚年齢に達しており体格雄大に育った。三弟のカチウンも成人に達し四弟のテムゲは成人間近である。ジェルメはいるし、ボウルチュもいたかも知れない。屈強の男集団となったテムジン一家には、タイチュート氏族も最早手出しできない。父イエスゲイと親しかった部民はテムジンに心寄せたであろう。一家が本来の遊牧地に戻る条件は整った。1182年の春、一家は再び父祖伝来の遊牧地であるオノン河、ホルホ河流域に戻ったのに違いない。

2.11 104節から115節のボルテ奪還作戦

既に述べたように、この部分は信用できない。その理由を以下に列挙する。

- ① 人質を奪還するのに武力を持ってするのは一番の下策である。救出前に隠されて見つけれないかも知れないし、悪くすれば殺されてしまう。近年、イスラム圏で頻発した例を見ても、金品か政治力によるのが普通の解決方法である。集史の記述のように、オン・カンの政治力によって返還されたとしなければならない。
- ② ブルギ河岸に移ってまもなくで弱小だったテムジンが1万の兵を率えられるはずがない。
- ③ 同じくテムジンと同年齢と思われるジャムカが2万の兵を率えられるはずがない。
- ④ メルキトへ侵入したとされるオノン河上流の道は何万もの兵が通れる道ではない。
- ⑤ ベルグテイが母を探していると聞き、母は、「わが子らが王者になったと言われましたが、ここで悪しき人に心迷うて〔その妻となった〕今、己が子の顔をどうして見られましようか」(村上訳)と言って身を隠した、と言う。しかし、テムジンが王者となってメルキトに討ち入ったのは1205年のことである。後年の話が混入していると思えない。
- ⑥ メルキトの政治堂を打ち壊し、貴婦人らを打ち捕らえたとの記述も、1198年オン・カンによるメルキト領侵攻か、1205年のテムジンによるメルキト征服時のこととしか考えられない。逃げ惑うメルキト民衆の姿もその時の表現と思われる。
- ⑦ ヒロク河を筏で渡ったとあるが、大軍が行うような渡河手段ではない。モンゴル領からメルキト領へと行った個人の冒険的侵入譚の一部が挿入されているように思われる。

3 まとめ

項 目	年 次
テムジン誕生。	1162 年
オン・カンの元からオノン河流域に帰る。	1176 年春
タイチュートに捕らえられる。	1176 年夏の初め
ココ・ノールに移る。	1176 年夏
ボルテと結婚する。	1179 年秋
ブルギ河岸に移る。	1179 年秋
メルキトに襲われ妻を奪われる。	1180 年夏
妻の奪還に成功。ジョチ生まれる。	1181 年春
テムジン数え二十一歳、再びオノン河流域に戻る。	1182 年春

4 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房，東京
：村上正二(1970)「モンゴル秘史1，2，3」平凡社，東京
『集史』：『史集』(1983)，商務印書館，北京

<研究書ほか>

- (1) 安田公男(2018)「チンギス・カンの前半生その1 テムジン誕生す」4-7 頁，HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)
- (2) 白石典之(2017)「モンゴル帝国誕生」165 頁、講談社選書メチエ

以上

改訂履歴

2019 年 10 月 12 日 初版